

オフナトサン信仰の構造—神山町の事例より

民俗班（徳島民俗学会） 高橋 晋 一¹⁾

1. はじめに

オフナトサン信仰とは、オフナトサンと呼ばれる神を祀る小祠まつ しょうしに対する信仰である。同信仰は徳島県全域に見られるが、特に神山町あぐい（鮎喰川流域）に顕著な分布を示す¹⁾。神山町成人大学講座の調査によれば、神山町内のオフナトサンは767カ所にも及んでいる（神山町成人大学講座、1979年、4頁）。

本稿では、神山町におけるオフナトサン信仰の特徴を指摘するとともに、全国に見られる同様の信仰現象の事例との比較をふまえながら、同町に見られるオフナトサン信仰の構造を明らかにしたい。

2. 神山町のオフナトサン信仰

1) オフナトサンの分布

オフナトサンは神山町全域に広く分布しているが、その分布には疎密が見られる。山あいの人家の転出入が比較的少ない地区（近世以前にさかのぼる歴史を持つ地区）では多くの家に祀られているのに対し、明治以降新たに開かれた街道筋の集落ではほとんど祭祀さいしは行われていない（大栗、1992年、98～99頁）。このことから、同町のオフナトサン信仰は少なくとも近世以前に源を持ち、それを継承した民俗であることがわかる。

2) 名称

オフナトサン・オフナツァン・オフナタサンなどと呼ばれているが、語源的には「フナド（岐）の神」に由来するものと思われる。このことから直ちに想起されるのは道祖神信仰との関連であるが、後述するように、オフナトサンは、ムラ境に防御的な意味合いをもって祀られる「典型的な」道祖神とは信仰形態をかなり異にしている。先行研究の中には、その名称から、オフナトサン信仰と道祖神信仰との関係を論じることに終始したものも少なくないが、これはオフナトサン信仰の実態の多様性を踏まえない、一面的な議論である。もちろん一般的な道祖神信仰と共通する伝承が一部みられることも事実であるが、後に触れるように、オフナトサン信仰の本質については、その複合的性格を十分考慮に入れた上で検討する必要がある。

1) 徳島大学総合科学部

3) 祭祀対象（ご神体）

祭祀対象（ご神体）は丸石（球形もしくは扁平^{へんぺい}の石）が多い。これは、天然に産出する丸石の珍奇な形状に神性を見出し、神として祀り上げる「丸石信仰」に由来するものと考えられる。大護八郎の言うように、丸石を魂籠^{こころかご}もる石（玉＝魂）と考え、神として祀り上げたものと言えよう（大護、1977年、212頁）。

神山町で丸石をオフナトサンのご神体として祀る習俗が発達したのは、鮎喰川という丸い自然石を得やすい環境が身近にあったことが大きな要因と思われる。ちなみに山梨県では、富士川上流の釜無川・笛吹川流域に丸石道祖神が多く分布している。このように、丸石信仰を、河川流域の民俗という視点からとらえることもできよう。

神山町では、オフナトサンのご神体として複数個の丸石を祀る事例が多い。大小の石に親石と子石、ご神体と供え物などという意味付けがなされていることもある。複数個の丸石を祀る（時にはご神体の丸石を随時加えていく）のは、霊力の増強を願う行為と考えられるが、奉賽^{ほうさい}された石の数の多さから、多産信仰との関連も生まれてくる。

神山町では、丸石はオフナトサンに限らず、山の神・水神などのご神体として祀られることもある。同じ丸石でもその意味（機能）をどう解釈（付与）するかによって、神格がさまざまに変わってくるのである。

なお、路傍の由緒不明の石塔（石神）がオフナトサンとして再解釈されるケースも見られる。海南町平井では、畑の端に土を盛り上げて石を二つ置いてあっただけのものが、これはオフナトサンだということにセツギ（割木）を供えるようになった（海南町史編纂委員会、1995年、252頁）。五輪塔や板碑がオフナトサンとされる例も少なくない（神山町下分字竹平、神山町広野字臼嶽^{うすだけ}、日和佐町奥河内字井ノ上など）。このような意味付けの柔軟さは、民間信仰（小祠信仰）の特質と言えるものである。

4) 祀られている場所

オフナトサンが祀られている場所は、路傍・家の庭・屋敷の入口・田畑の端・石垣の中・雑木の根元など、私有地内の適当な場所である。全県的に見ても、オフナトサンは田畑^{あぜ}の畦や屋敷の隅に祀られていることが多い。オフナトサン信仰は、基本的に家を祭祀単位とした私的な性格を持っていると言える。

立地から見る限り、オフナトサンには道祖神信仰の本質であるムラの境界を塞ぐ神（サイノカミ）としての性格（公的な性格）がほとんど見られない^[2]。オフナトサン信仰の本質は道祖神信仰というよりも、家を単位とした私的な（個別化した）小祠信仰と考えた方がよいであろう。

5) 社殿の形態

社殿の形態としては、4枚の平たい石で竈^{かまど}状の石室を築いた「オカマゴ」と呼ばれる

ものが多数を占める（写真1）。石祠（御殿）を建てて祀るのは、家の改築などを契機として行われるようになった比較的新しい形である（写真2）。

オカマゴは、神祭祀の原初形態として路傍の小祠に時折見られる形であり、神山町特有の習俗というわけではない。同様のタイプの小祠は県内各地や近隣諸県においても見られる。例えば、岡山県南部には「石クド」と呼ばれる、平石を竈状に組んだ形の小祠が多く分布している。

しかし「オカマゴ」タイプの小祠の分布が、特に神山町に密であることは確かである。これは、鮎喰川流域に発達した「青石（緑色片岩）文化」を背景としたものと考えられる。同川流域では、比較的豊富に青石が産出する。青石は平たく割れやすい性質を持ち（沖野、1957年、3～4頁、31～34頁）、オカマゴを作るには最適の素材である。青石は板碑の材料としても多く使われ、神山町では現在661基もの板碑の所在が確認されている（神山町教育委員会、1983年、15頁）。

6) 祭祀単位

オフナトサンの祭祀単位は、家・近隣・同族・地域など多様であるが、実際にはほとんどが家単位で祀られている（県内他地域でも同様の傾向が見られる）。

徳島県のオフナトサン信仰は、これまでその呼称に引きずられ、道祖神信仰との関連で論じられることが多かったが、家単位で祀られるという信仰の実態を考えると、屋敷神信仰との関係を看過するわけにはいかない。オフナトサン信仰を、全国各地の類似信仰—中国地方の荒神（地荒神）、和歌山県の地主神、高知県の祝神など⁽³⁾—と比較検討する必要がある。

神山町の事例を通観すると、オフナトサンは現在、実質的に各戸の屋敷神＝家の守護神的機能を果たすものとして地域社会に取り込まれているように思われる⁽⁴⁾。ただしオフナトサンには、荒神や祝神に見られるような祖霊神・崇り神としての性格は希薄である。また、道祖神信仰に由来するいくつかの伝承は、他地域の屋敷神には見られないものである。

7) 祭日



写真1 オフナトサン（神山町上分字門屋）



写真2 オフナトサン
（神山町神領字中津）

祭日は、基本的に旧11月16日（または12月16日、10月16日）・旧1月16日の年2回である。問題は祭りが年2回、秋と春に行われることの意味であるが、全国各地の屋敷神信仰の事例を参照することによって類推できる部分が少なくない。

屋敷神の祭りは、全国的に年2回、秋と春に行われるケースが多く、秋祭りは旧11月に行われることが多い。春祭りは全国的には旧2・3・4月に集中しているが、神山町で旧1月に行われているのは、小正月（1月15日）に引きずられた可能性もある。

次に、なぜ祭日が16日かという疑問が残るが、屋敷神の祭日として16日（15日の前後）が選ばれることは決してまれではない。長野県東筑摩郡の祝殿の祭日は、4月15日を中心として16・17日、4月10日などが多い（和歌森、1952年、2～5頁）。鹿児島県指宿地方の内神の祭りは旧11月15日前後に行われるが、そのうち16日を祭日とするものも少なくない（小野、1992年、104～161頁）。

こうした年2回（旧11月16日・旧1月16日）という祭日の設定の仕方は、オフナトサンの屋敷神的性格を反映したものと言えるだろう。

8) 供え物

旧11月16日には綿着（箸または茅などの棒状のものに綿を巻き付けたもの）を供え、旧1月16日には帷子（紙衣。長さ15cmほどの半紙を着物の形に切ったもの）を供える習わしがある。

綿着の風習は、11月15日の「綿着祝」（子供が誕生した初めての冬に、子供の両親の里から新たに綿を入れた衣服をこしらえて持ってくるという麻植・阿波・板野郡などの習俗）との関連が想定される。綿着祝とオフナトサンの祭日が続くので、オフナトサンにも綿着（といっても、形としては簡略なものだが）を供えるようになったのではないだろうか。

九州各地には、屋敷神に紙衣を供える習俗が見られる。大分県国東半島の屋敷荒神（各戸屋敷神）は屋敷地内の一角に祀られ、石祠の中に丸石または御幣を納めたものが多い。祭りは年2回で、旧6月と旧10月（または11月）に行われる。ミキンガエ（御衣換え）と言って、夏には紙の衣を1枚（ヒトエ）、秋には紙の衣2枚（アワセ）を祠の中の石に着せる（直江、1966年、100～101頁）。神霊を擬人化して、季節に応じた衣を供えるという発想は、オフナトサンと共通している。

神山町では、大晦日に割木1対を注連縄で束ねてオフナトサンに供える風習がある。これをセチギ（幸木・斎木）と呼ぶ。正月14日にセチギを下げてきて、翌15日にこれでお粥を炊くところもある。この習俗は全県的に見られることから、小正月行事との習合が考えられる。

また、町内にはオフナトサンに豆ご飯を供える風習もあるが、これについては、子供が

豆を拾っている間に親が食べることができるという伝承がある。

9) 禁忌

神山町全域で聞かれる伝承として、「音を立てるとオフナトサンの子供が目を覚まし、供物が親の口に入らないので、参拝するときは音を立てず、無言で参らなければならない」というものがある。重要なのはおそらく後半部分の言説（無言で参ること＝オフナトサンの聖別）であり、その理由の説明として前半部分があるものと思われる。神仏に参るときには静寂を守らなければならないとする習俗は、全国的にも広く分布している。

また、「オフナトサンのご神体は蛭^{ひる}だから、塩を祀ってはいけない」（蛭は塩に弱いとされる）という伝承も広く聞かれるが、その背景として、小祠に蛭^よ除けを願う習俗（高知県の祝神の事例など）（神尾、1974年、217頁）との関係、祠の立地（蛭が多く住むような湿ったところ）との関連なども想定される。

10) 伝承

「オフナトサンは12人の子持ちである」という伝承は、神山町をはじめ全県的に分布している。このような伝承が生まれた背景は定かではないが、ご神体である石の多さ（および多産信仰）からの敷延、あるいは12カ月＝1年を象徴したものとも考えられる。なお、地域によっては「9人の子持ち」（日和佐町など）という伝承も聞かれる。

11) 御利益

神山町では、手足の痛みを治してくれる神、旅の平安を守る神、子供の健康を守ってくれる神といった伝承が多く聞かれるが、同様の伝承は、県内各地に分布している。背景には道祖神信仰との関連が見て取れる。

また、オフナトサンは多産の神で、子供のない人が授かるようにお参りするという地域も少なくない。その他、願を掛けると失^うせものが出てくるという伝承もあるが、これは近年のものという話もある（上勝町誌編纂委員会、1979年、1037頁）。

家の守り神という伝承も広く伝えられているが、これはオフナトサンの屋敷神的性格を表したものと言えよう。

3. まとめ

ここまでの検討から明らかになったように、神山町のオフナトサン信仰は、さまざまな要素が重層化した複合的性格を持っている。すなわち、オフナトサン信仰は下記のようないくつかの要素が複雑に絡み合うことによって、一つの全体を構成しているのである。

- ・屋敷神（家の守護神）的性格—祀られている場所、祭祀単位、祭日。
- ・道祖神的性格—名称、御利益（手足の痛みを治してくれる神など）。
- ・丸石信仰に由来する性格—祭祀対象（次項の小祠信仰的性格にも共通する）。

- ・小祠信仰的性格—社殿の形態、意味付けの柔軟性。
- ・地域信仰としての性格—綿着・帷子・幸木・豆ご飯などを供える習俗、伝承（12人の子持ち）、禁忌（ご神体は蛭）。

以上のような複合的性格が、どのような過程をたどって形成されたのかを明らかにすることが次の課題となるが、ここではひとまず以下のような仮説を提示しておきたい。すなわち、神山町では、はじめ各家の屋敷地内にオフナトサンの小祠を靈験あらたかな神として祀る習俗があった（この時、丸石が「ご神体」として選ばれた）。この時点ですでに道祖神信仰の本質（境界を塞ぐ神としての性格）は不明瞭なものとなっていたが、オフナトサンという名称に付随して、道祖神にまつわるいくつかの御利益は伝承されることになった。祠が屋敷地内に祀られていることから次第に屋敷神的性格を整えていき、さらに信仰が地域社会に定着していく中で特有の地域信仰的要素が付与された。また、家単位で祀られていることから、家ごとの伝承や祭祀形態のバリエーションが生み出された。論証は今後の調査研究を待ちたいと考えている。

注

- (1) この理由として、神山町においてはオフナトサンの屋敷神（家の守護神）的性格が強調されている点、素材（丸石および青石）が比較的入手しやすい点、河川流域の地域信仰として展開した点などを挙げることができる。
- (2) 境界神としての機能は地蔵・不動・花折さんなどの代替的神仏が果たしている。オフナトサンと道祖神が機能分化している事例も見られる（川島町史編集委員会、1979年、504～509頁）。
- (3) これらの神は多義的な性格を持ち、屋敷神・同族神・地域神など多様な形で祀られるが、特に屋敷神としての性格が強い。
- (4) 丸石を家ごとに祀る習俗は珍しいものではない。山梨県・静岡県各地、薩摩・大隅半島などでは、丸石を屋敷神のご神体としている。

主要引用・参考文献

- 荒岡一夫「徳島の民俗神」（石躍胤央・高橋啓編『徳島の研究 6 方言・民俗篇』清文堂出版、1982年、75～124頁）。
- 荒岡一夫「ふなと神考（上）（下）」（『ふるさと阿波』110・111、1982年、16～18頁・7～12頁）。
- 飯田義資「船戸神考」『粟の抜穂 人の巻』徳島県教育会、1975年、149～151頁。
- 大栗玲造「神山のオフナトさん」『徳島の文化』8、1992年、97～107頁。
- 沖野舜二『阿波板碑の研究—序説』小宮山書店、1957年。
- 小野重朗「指宿地方の内神一覧」（『神々と信仰』第一書房、1992年、104～161頁）。
- 海南町史編纂委員会編『海南町史・下巻』海南町、1995年。
- 神尾健一「民間信仰」（十和村教育委員会編『十和の民俗（上）』同委員会、1974年、115～194頁）。
- 上勝町誌編纂委員会編『上勝町誌』同委員会、1979年。

神山町教育委員会編『神山町の板碑』同委員会、1983年。

神山町成人大学講座編『神山のおふなとさん』神山町社会教育課、1979年。

川島町史編集委員会編『川島町史・上巻』川島町、1979年。

大護八郎『石神信仰』木耳社、1977年。

武田久吉『道祖神』アルス、1941年。

直江広治『屋敷神の研究』吉川弘文館、1966年。

仁木 堯「民間習俗『おふなとさん』について（一）（二）」（『ふるさと阿波』120・121、1984年、8～13頁・2～6頁）。

丸石神調査グループ『丸石神—庶民のなかに生きる神のかたち』木耳社、1980年。

柳田国男「石神問答」（『定本柳田国男集12』筑摩書房、1963年、1～161頁）。

和歌森太郎「祝殿としての稲荷」（『民間伝承』16-9、1952年、2～5頁）。